

利用者懇談会庶務幹事に就任して

東京工業大学 応用セラミックス研究所

佐々木 聡

SPRING-8の建設も大詰めをむかえています。3月25日には8GeV蓄積リングへの電子ビーム蓄積が成功し、翌26日には放射光がビームラインにまで導入されました。まもなく、ビームラインの使用時検査も行われようとしています。このような順調な仕上がりにお祝いを述べるとともに、関係者のご苦勞に敬意を表します。建設フェーズから利用フェーズへと移行する重要時期に当り、結成から4年を経た利用者懇談会も益々必要とされると確信しています。

思えば15年前にもPhoton Factoryで、放射光出現にすごい意気込みや期待がありました。その結果として、異分野の研究者との共同研究が飛躍的に発展しました。そして今まさにSPRING-8では、産官学に地域を含めた壮大な国家事業が巨大な共同研究として発展しようとしています。最近の日本の研究予算は確実に増えていますが、依然として応用研究に傾斜しています。基礎研究は、多くの場合に応用の基礎的研究という意味で使われています。SPRING-8の放射光利用では、もっと広く基礎分野を取り込み、枝葉末節な研究や「皆で渡れば怖くない」的な研究を避けることが望まれます。そして、結果が出ないことを恐れないサブグループや研究者の存在を期待します。更に将来を眺めるとき、学生を含めた若い研究者に施設が大きく開放され、SPRING-8が教育の場をも提供することを願っています。

共同利用の円滑化や研究の高度化には、利用者の立場に立った施設運営が必要です。菊田会長の活動方針にも述べられていますように、利用者懇談会の使命は、会員の要望や意見を共同チーム・JASRIと議論することで、また逆に、施設側の要望や意見を会員に投げかけることで、両者の間にいい形を作ることです。関係者のご努力によるところが大きいですが、種々の団体と友好な協力関係ができ、SPRING-8が徐々に利用しやすい形態に整理されてきていると思います。先日の幹事会でもいい形を作る努力がありました。問題化する事項には必ず何らかのすれ違いが存在し、情報伝達の重要性が再認識されます。一方通行の通信手段が増えている中で、会議・電話のような双方向のやりとりは貴重です。

利用者懇談会は、施設・内部スタッフとユーザーとの接点であり、フィクサーとしての役割を求められています。管理する側と使う側という異文化に対し、「いい関係」が維持できるよう微力ながら努力したいと思います。

庶務幹事を引き受けて思ったこと

姫路工業大学 理学部

鳥海 幸四郎

前の庶務幹事から庶務幹事の話があると伺ったときは、ちょっと困ったな、と思いました。というのも、今年は学内の雑用（これも大学の運営にとっては重要なのですが）の当たり年で、もうこれ以上は、かなわん、と思っていたからです。しかし、一方でSPring-8で仕事をしようとしているのに、利用者懇談会の仕事を何もしないのでは一生懸命ボランティアで働いている仲間に申し訳なく、今後の仕事をする上でプラスにはならないと思い、軽い気持で菊田会長のご指名を引き受けることにしてしまいました。

庶務幹事としての事務の引き継ぎを事務局の佐久間さんを交えて前の庶務幹事の坂井さんから受けました。その時、今年の秋のSPring-8の供用開始に合わせて組織に変更があり、管理運営の主体が共同チームから高輝度光科学研究センターへ移行するという話を伺いました。今まではサブグループの一人のメンバーとして、SPring-8の組織はよく理解できないと漠然と思っていました。しかし、利用者懇談会の幹事を引き受けるにあたって、これは私の勉強不足とは思いますが、やはり今一つ理解しにくい組織であるなという印象を持っています。今後、SPring-8の利用が本格化するにあたって、課題申請、利用手続き、利用実験、さらに新たにビームラインの設置を申請するときなど、管理運営体制の整備と合理化を早急をお願いしたいところです。とくに、SPring-8の建設目的、行政的な意図ではなく、“科学・技術の飛躍的進展”を目的としていることを最大限に配慮した、ガラス張りの合理的な運営がされることを望む次第です。利用者懇談会としてもSPring-8の管理運営主体に“質の高い利用実験がスムーズに行える”ように強く要求する必要があるでしょう。

先日、利用者懇談会の今年度第1回の幹事会が東京であり、早朝西播磨の未来都市(?)から出席致しました。庶務幹事は、その名前どおり雑用引き受け係ですが、他の幹事、特に利用幹事や運営幹事の役割は供用開始の時期にあたる今は、大変に重要であると改めて認識させられました。今年の秋の供用開始に向けて、利用者側としてのSPring-8への要望をいかに実現させて、質の高い研究をよりスムーズに実行させるか、利用者懇談会の大きな役目であろうと思われます。姫路工大理学部を除く利用者にとって、SPring-8で使う道具を一から十まですべて運び込むことは現実的には不可能であり、初期の段階では色々な小さな道具が不足すると思われます。これらの要望を的確に把握して、如何に施設側を説得するかも利用者懇談会の果たす役目でしょう。他の幹事の仕事まで越境してしまった感じですが、利用者懇談会の重要性を少しづつですが理解しているところです。

新米幹事として

日本原子力研究所 大型放射光開発利用研究部

水木 純一郎

日頃からNo!と言える人間を目指しているのですが、この人生指針に反し4月より前任の神戸大難波孝夫氏の後を受けて編集幹事を引き受けることになってしまいました。菊田会長のあのソフトな声と押し、説得のうまさに打ち勝つにはまだまだ人生経験が必要なようです。でもまあ編集幹事には既に3年目を迎えておられる岡山大の圓山裕氏、それに大ベテランの利用者懇談会事務局の佐久間明美さんが共に編集に関ってくださっているので、彼・彼女らの指示の下で動いていけばいいと思っています。ただ、現在の予定では光彩をJASRIが発行している“SPring-8利用者情報”誌に来年1月号からマージすることでその準備が始まろうとしており、少し新たな作業が必要なようです。多分、こういう時には色々と内部調整?が必要なので、利用者から成る組織の幹事といえども施設者側にも近い、すなわちSPring-8利用者情報誌の編集に携わっている方達といつも顔を合わす事のできる私のような立場の人間が少しは役に立つのかもしれませんが。私の大雑把な理解では、もともと光彩はSPring-8の利用者側が創る利用者のための機関紙、SPring-8利用者情報誌は、施設者側が創る利用者のための機関紙、という位置付けで大きくは間違い無いと思っています。とすれば、両方とも利用者のためのSPring-8、あるいはその周辺に関する機関紙ということで一致しており、これら両方を受け取っておられる多くの方達は、違いについてあまり意識はしていないのでは無いでしょうか。その証拠に、今回光彩の原稿依頼を出した積もりでしたが、「事情があり依頼されたSPring-8利用者情報に書けないので、他の研究者に頼んでほしい」という丁寧な断りが送られてきました。また、私も今までにも両方の機関紙から同じような内容の原稿を頼まれたことも有り、正直に言って二つの機関紙が一つになったらなー、と思っていました。こんな時に編集幹事をおおせつかったのですから働かざるを得ません。本来、異なった立場の組織がそれぞれ発行していたものですから単純に、「はい、それじゃ一つに」とはいかないでしょうが、放射光合同シンポジウムも行われていることだし、とにかく利用者のための機関紙ということで一致しているのですからやれるはずです。このためにも数ヶ月に一回の編集委員会だけで話し合うのでは無く、必要なときには、「あの一、ちょっと」と話のできる私はいいかもしいと思っています。しかし、あくまで利用者懇談会の会員の一人としての立場で編集に参加していくことが大切ですので施設者側に近いことがネガティブに出ないように注意しなければとも考えています。

御存知のように、3月26日に最初の放射光を観測し、今は10月の供用開始に向けてみんな一心不乱で頑張っています。人生に一度あるか無いかの貴重な経験を、私はSPring-8のサイトにいて味わっているのですが、すこしでもこの様子を光彩の記事で皆様に感じてもらえればと思っています。